

イケメン教師の受難

―伝説の運動会篇―

第一巻 恥辱の借り物競走

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 陵辱ショーのはじまり

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難―運動会篇―」 第一巻
恥辱の借り物競走」(以下本書と表記する)
の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し

た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子フア

イル、ビデオ、テープレコーダー)により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま

す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第

619条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドルの存在であつた。

しかし一方で、男子生徒達はそんなイケメン教師の事を良く思わず、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罾に嵌まり、教師生命を脅かすほどの恥ずかしい弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師生命を守るために彼らの奴隷として服従すること誓う。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを踏みにじられるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥ることもあつたが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に生きていた。

そうして、学園の一大イベントである運動

会の季節が訪れ・・・。秋晴れの空の下、校庭で運動会が始まり、全校生徒や大勢の父兄達が熱狂する中、目玉競技の一つである「借り物競走」の順番が巡ってくると、校庭のど真ん中に立つイケメン教師について生徒達の魔の手が襲い掛かる。

なんと、真琴が担任するクラスの生徒達が次々と借り物の記された紙切れを持って担任教師の元へ駆け寄ってきて、その身に纏っているモノを引ったくるように奪い取っていったのだ。

やがて、イケメン教師はあつという間に校庭のど真ん中で禪一丁の姿になり、運動会はまさにイケメン教師の陵辱ショーと化していく。

それから、真琴は全校生徒や観戦に訪れた大勢の父兄、それに同僚教師達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒していくことになったのだった。

■ 第一章 陵辱ショーのはじまり

秋晴れの空の下、高校の校庭ではこれから
学園の一大イベントである運動会が行われよ
うとしていた。校庭には観戦に訪れた大勢の
父兄達の姿があり、日曜日だから仕事が休
みの父親達の姿も目立った。
元々、運動会は例年平日に開催されていた
のだが、父親達も運動会を是非観戦したいと
いうPTA役員の相葉伸介の強い要望により
今年から日曜日に開催されることになったの
だった。
発案者である相葉伸介は、子供が同じクラ
スの父兄達と一緒に観覧席に座り、運動会の
始まりを心待ちにしていた。
「今年の運動会はきつと盛り上がりますよ」
伸介が他の父兄達に向かって意味深な笑みを
浮かべながら告げると、皆、その笑みに隠さ
れた邪な企みを感じ取ったようだった。
「あのイケメン教師にまた何かさせるんです

な（笑）「そりゃ楽しみだ。あのイケメン教師が大勢の前で恥ずかしがる姿を是非見てみたいものだ（笑）」
「アイツもとうとう学校中のペットになるのか（笑）」
他の父親達がそう言つて笑い合う姿を伸介は楽しそうに眺め、これから始まるイケメン教師の羞恥ショーに思いを馳せていた。
伸介の息子の担任を務める三神真琴は、二十五歳のイケメン教師で学園のアイドル的存在であった。そんなイケメン教師と伸介が初めて出会ったのは、一学期の終わりに行われた三者面談の席だった。
伸介は、自分の息子がイケメン教師の弱みを握り、それをネタに脅迫して奴隷の如く服従させていることを知ったのだ。そしていつもクラスの授業ではイケメン教師が禪一丁の姿にさせられていることを聞いた伸介は、三者面談の席でイケメン教師に禪一丁になるよ

う命じ、それから息子だけでなく自身の奴隷にもしたのだった。

而して、伸介は一学期の終わりに特別に父兄参観を開くよう真琴に命じ、父兄参観の教室で大勢の保護者の父親達が見守る中、イケメン教師に屈辱の限りを味合わせた。

輝一丁での授業、全裸四つん這い、全裸逆立ちで教室中を徘徊、教壇で全裸土下座謝罪黒板の前に全裸磔、保護者全員での手コキ、挙句の果てには校庭を輝一丁で走らせた後、校庭の隅にある鉄棒に全裸で緊縛していたぶったのだった。

そのため、伸介の息子と同じクラスの父兄達は全員イケメン教師の裸を拝み、その痴態を堪能し、もはや真琴のことを自分たちのペットとしか見ていなかった。だから今日の運動会でも、イケメン教師が途轍もなく過激な羞恥ショーを披露してくれることを期待していたのだ。

やがて、校庭には全校生徒が集まり、つい

に運動会が始まりの時を迎えた。伸介たちは自分の子供よりもイケメン教師の姿を探し、隅の方で憂鬱そうな表情を浮かべている真琴を見つけた。

「あのイケメン教師、随分暗い顔してるじゃないか。これから自分がどんな目に遭うのかきっと分かっているんだろ（笑）」

「あの顔がこれから羞恥に塗れるのか楽しみだぜ（笑）」

伸介の傍に座る父親達はそう言って笑いなगर、イケメン教師の姿ばかり眺めていた。

競技が始まると、生徒達は熱狂し、観覧席に座る父兄達は皆、自分の子供を懸命に応援した。そして、教師達もまた自分のクラスの生徒達を応援しながら共に戦っていた。しかしそんな中、真琴だけは相変わらず浮かない表情で、運動会の熱狂に一人だけ取り残されていた。

「もうそろそろだな」

伸介は観覧席からイケメン教師を意味深な表

情で見つめながらそう呟いた。
そうして競技は淡々と進み、校庭では高校
二年生による借り物競争が始まろうとしてい
た。真琴は校庭の中央で同じ二年生を担当す
る他の同僚教師達と共に生徒達を応援するこ
とになった。
借り物競争は、コースの途中に置かれた箱
の中から紙を一枚抜き取り、そこに書かれた
モノを校庭にいる誰かから借りてゴールする
という、運動会を盛り上げる目玉競技の一つ
だった。
観覧席に座る伸介とその周りにいる父兄達
は不敵な笑みを浮かべ、校庭のど真ん中に佇
むイケメン教師を見つめていた。そして、競
技の列に並んでいる伸介の息子でクラス委員
を務める相場も同じように不敵な笑みを浮か
べていた。
実は今回の借り物競争には伸介達親子の邪
な企みがふんだんに施されていたのだ。それ
はつまり、これから始まる借り物競争がイケ

メン教師を公衆の面前で徹底的に辱めるための羞恥ショーであることを意味していた。スタートの合図を告げるピストルが打ち鳴らされると、一組目の生徒たちが一斉に走り出し、コースの途中に置かれた箱の中から紙を抜き取った。皆、紙に書かれた借り物を見ると驚きや喜び、戸惑いなどの様々な表情を浮かべ、それぞれの借り物を探しに観覧席の父兄や応援席にいる生徒たちの方へ駆けて行つた。

すると、一人の男子生徒が校庭のど真ん中に立つ真琴の方に駆け寄つて来たのだ。彼は真琴が担任するクラスの生徒、菅井だった。

「先生、コレお願いします！」

菅井はそう言つて手に持った紙を真琴に見せた。そこには『白いTシャツ』と記されてあり、菅井は真琴の着ている真っ白なTシャツを借りに来たようだった。

「えっ・・・」

真琴は思わず躊躇つてしまった。なぜなら、

Tシャツを脱げば上半身裸になってしまいい、
全校生徒や大勢の父兄がいる前ではさすがに
恥ずかしかった。
「先生、何しているんですか！サツサと貸し
てください！」
競技で一着を狙っている菅井は、なかなかT
シャツを貸してくれないイケメン教師に苛立
った様子で急かした。
「あぁっ、ゴメン・・・他の人に声を掛けて
くれないかな」
真琴が申し訳なさそうにそう返事すると、菅
井は苛立ちを募らせ、真琴の耳元で囁いた。
「先生、そんなこと言うなら、先生の恥ずか
しい動画を学校の掲示板サイトにアップしま
すよ」
菅井は、イケメン教師が揮一丁で授業する様
子を捉えた動画をクラスメート達と共有して
おり、それをネタに校庭のど真ん中で真琴を
脅迫したのだ。
「そんな・・・」

それは真琴にとって殺し文句のようなものだ
った。いつかの放課後に相場達に罠に嵌めら
れ弱みを握られてからというものの、担任する
クラスの授業ではいつも揮一丁になることを
義務づけられ、そのせいでクラスの生徒全員
に恥ずかしい動画を共有されてしまい、彼ら
に逆らうことができなくなってしまうのだ
自身、の奴隷としての立場を改めて思い知ら
された真琴は、もう菅井の要求に応じるしか
なく、運動会の行われている校庭のど真ん中
で身に纏っている真っ白なTシャツを脱いで
いった。
「オオッー」
次の瞬間、校庭には観衆の驚きと感嘆の唸り
声が轟いた。校庭にいる全校生徒や父兄、そ
れに同僚教師たちは、上半身裸になったイケ
メン教師の逞しい体をギリギリした眼差しで
眺めた。
ああっ、恥ずかしい・・。真琴は剥き出
しになった素肌に無数の熱い視線が突き刺さ

るのを感じ、羞恥に身を震わせた。
「先生、ありがと！」
菅井は真琴の手からTシャツを引っ手繰るよ
うに奪い取ると、そのままゴールめがけて勢
い良く走り去った。
結果、真琴は借り物競争の競技が終わるま
で上半身裸でいなければならなくなり、校庭
のど真ん中で暫く羞恥に耐えるしかなかった。
「なんだか面白いことになりそうだな（笑）」
「借り物競争が終わる頃には先生スッポンポ
ンになっちまうんじゃないね（笑）」
「それ最高じゃん（笑）」
競技の出番を待つ生徒たちはそう言って笑
ながら上半身裸になったイケメン教師を眺め
ていた。
運動会の目玉競技の一つである借り物競争
は、イケメン教師の逞しい上半身が露わにな
ったことから一気にヒートアップし、応援席
に座る生徒も観覧席に座る父兄も皆、このま
まいケメン教師の着ているモノが一枚ずつ剥

がされていくことを期待した。
そして、その全員の期待はこの後着実に叶
えられていくことになった。次の組がスター
トすると、またも真琴のクラスの男子生徒が
借り物の記された紙を持ってイケメン教師の
元に駆け寄ってきたのだった。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説
『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罨に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅され

た春輝は仕方なく撮影に応じることになり・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をする。とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていく、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。